

小学生を対象とした造形表現ワークショップの実践 —取手市の学童保育における染色活動—

表 良 樹
(東京藝術大学美術学部助教)

表 麻 弥
(染色家)

表 真 美
(教育学科)

本研究の目的は、地域型アートプロジェクトの一環として、学童保育における、小学生を対象に行った染色のワークショップの実践結果について報告することである。ワークショップは、2022年8月から2023年2月に、取手市内の小学校2校における学童保育で、低学年グループ、3年生以上グループを対象に各4回、計16回実践された。各活動の参加人数は9名から25名、長期休暇以外の活動時間は約2時間であった。児童の多くは活動に意欲的に取り組み、作品の完成度は高かった。また、児童自身の創意工夫により、実践者が予想しない個性的な作品を制作する児童も複数みられ、4回の活動による思考力・表現力の高まりが観察できた。

キーワード：学童保育、染色、造形表現、ワークショップ、地域型アートプロジェクト

1. 研究の背景と目的

(1) 表現力と造形活動

平成29年改訂の小学校学習指導要領、総則において育成すべき3つの「資質・能力」の1つに「思考力、判断力、表現力等」(下線は筆者による)が挙げられた¹⁾。PISAリテラシーの影響を強く受けて導入された児童の「表現力」については²⁾、すべての教科、特別の教科道徳、外国語活動、総合的な学習の時間における教育が明示された。体育科においては、低学年に「表現リズム遊び」中・高学年には「表現運動」が新設された。図画工作科では、従来表現活動は学習の要であり、目標の1つに「楽しく表現したり鑑賞したりする活動に組み込み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しい生活を創造しようとする態度を養う。」(下線は筆者による)という記述がある³⁾。造形活動は、児童の表現力育成の基礎を養うものである。

さらに、ワークショップにおける造形活動は、児童の協働活動としての側面があり、平成29年告示の学習指導要領で新しく示された「主体

的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」にもつながる⁴⁾。

このように、小学生の造形活動は、今日の実践において、子どもたちに求められる能力を培うために重要な活動である。

(2) 小学生を対象とした造形ワークショップの先行研究

小学生を対象とした造形ワークショップについての先行研究を概観すると、コロナ禍の影響下において、各々の自宅で、宇宙のファッションショーの衣装をデザインするという設定のもと、布用絵具でTシャツに模様を描く活動を行った実践がある⁵⁾。また、幼稚園の卒園生を対象とした軟質発泡ポリウレタン製のチューブを用いた街づくりの造形ワークショップに関する報告⁶⁾、研究のため依頼をした19名の小学生を対象にモダンテクニック(偶然性や自然物を利用して様々なイメージを生み出すことにつながる方法)の可能性を探った報告⁷⁾などがみられた。各地で様々な活動が行われていることが推察されるが、報告される例は多くない。

そのなかで、東京都の公立児童館における

親子の造形ワークショップでは、美術的・教育的効果が得られるとともに、児童らによる自発的行動が引き出されたとしている⁸⁾。

(3) 学童保育におけるワークショップ

厚生労働省は、いわゆる学童保育を「放課後児童クラブ」と呼んでいる。放課後児童育成事業は、「児童福祉法第6条の3第2項の規定に基づき、保護者が労働等により昼間家庭にいない小学校に就学している児童に対し、授業の終了後等に小学校の余裕教室や児童館等を利用して適切な遊び及び生活の場を与えて、その健全な育成を図るもの」とされ、令和5年現在、公営・民営を含めて26,683か所が設置されている。登録児童数は1,392,158人であり、共働き世帯・一人親世帯の増加、地域のつながりの希薄化などを背景に25年前と比較すると約4倍に増加した⁹⁾。

学童保育は、多くの小学生が放課後等を安全・安心に過ごし、多様な体験・活動を通して、次代を担う人材育成の場である。より一層の充実を図る必要がある。小学生の放課後、長期休み中の生活を豊かにし、かつ表現力育成の教育効果を高める造形ワークショップは極めて意義のある活動と言える。

(4) 教材としての「染色」

「染色」は、構成、色彩、素材、染色技術等が統合した総合造形芸術である。

布を染色、または糸を染めて織る「染織」は、暮らしを華やかに彩ることにより身のまわりを豊かにする工芸として、世界各地で受け継がれてきた。染織は人類の文明の発祥と共に古く、民族の伝統や時代の好尚を明確に刻印している¹⁰⁾。東アフリカに伝わり、今も人々の生活に根ざすカンガやキテンゲ、インドネシアのバティックなどの芸術性は高く評価されている。

我が国においては、2022年11月16日現在、経済産業大臣が指定する240品目の「伝統的工芸品」のなかに、「染色品」が13品目含まれている（1 東京染小紋、2 東京手描友禅、3 東京無地染、4 加賀友禅、5 有松・鳴海絞、6 名古屋友禅、7 名古屋黒紋付染、9 京友禅、10 京小紋、11 京黒紋付染、12 浪華本染め、

13 琉球びんがた)¹¹⁾。また、タデ藍をすくも法により製藍して天然灰汁発酵建てによって染める日本の伝統的な「藍染」は、奈良時代、大陸から出雲地方に伝わり、全国に広まった¹²⁾。現在では、栃木県（益子木綿）、滋賀県（近江木綿）、島根県（出雲織）、徳島県（阿波藍）、福岡県（久留米緋）などにおいてその伝統が受け継がれており、「ジャパングルーン」として世界的にも有名である¹³⁾。

平成29年告示の学習指導要領では、前回の改訂に引き続き、重視することの一つに「伝統や文化に関する教育」を挙げ、「我が国や郷土が育んできた日本の伝統や文化を学ぶ」とされ、家庭科においては、「和食や和服」が具体的に提示された¹⁴⁾。小・中・高での家庭科の時間に、手ぬぐいの染色体験を通して、伝統文化を継承する視点を育む実践が報告されている¹⁵⁾。染色はまさに「我が国や郷土が育んできた伝統や文化」であり、伝統文化を育む教材として相応しい。さらに前述のように、世界の文化に目を向けるきっかけともなり得るものであり、教材としての価値は大きい。

(5) 地域とアート

本研究の活動は、「地域型アートプロジェクト」として25年間継続している「取手アートプロジェクト」の一環として実践された。

「地域型アートプロジェクト」は、アーティストが中心となって地域の人々などと共に制作・実施する活動であり、2000年以降に日本各地に広がった。里山の廃校、まちなかの空き店舗などを舞台に様々な形態で行われている（表1）。表1に示すアートプロジェクトは単年度事業を継続して実施しているのに対し、2年や3年に1回、期間限定で行われる「国際芸術祭」も各地で開催されるようになった。「大地の芸術祭」（新潟県十日町市、津南町）や「瀬戸内国際芸術祭」（香川県直島他）などがある。規模が大きく注目を集めやすいことで、経済波及効果が大きく、地域振興の一つの事例となっている¹⁶⁾。

(6) 研究の目的

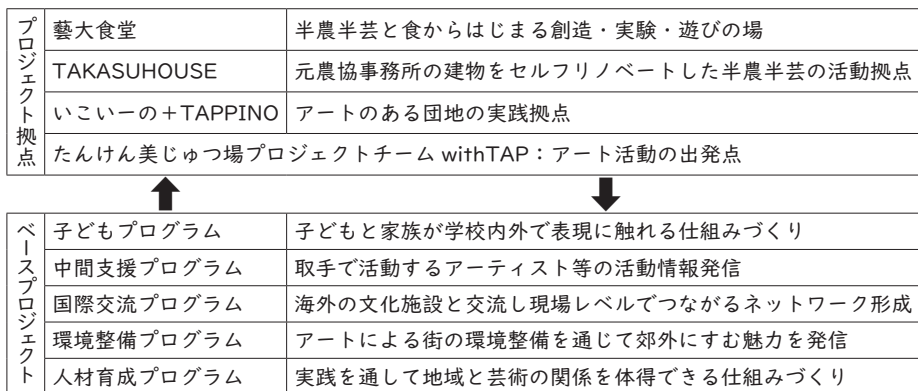
これまで述べてきたように、造形活動は子ども

表1 日本の主なアートプロジェクト

名称	開催地	主催(2018時点)	実施期間
取手アートプロジェクト	茨城県取手市	市民、市、大学(実行委)	1999～
プレーカープロジェクト	大阪市浪速区・西成区	誌、区(実行委)	2003～
アサヒアートフェスティバル	全国各地	市民、アサヒビール(実行委)	2003～2016
黄金町バザール	横浜市中区	NPO法人	2008～
寿クリエイティブアクション	横浜市中区	任意団体	2008～
小金井アートフル!アクション	東京都小金井市	都、市、財団、NPO法人	2009～
TERATOTERA	東京都武蔵野市他	都、財団、一般社団法人	2009～
ベップ・アート・マンス	大分県別府市	実行委	2011～
アートアクセスあだち音まち千住の緑プロジェクト FUKUSHIMA	東京都足立区	区、都、大学、NPO法人、	2011～
	福島県福島市	NPO法人	2011～

吉澤弥生(2019)より筆者作成

表2 TAPの拠点とベースプロジェクト



TAP ホームページより筆者作成

もの表現力等の能力向上にとり重要である。また、学童保育で過ごす子どもたちが増える現状の中、学童保育における教育の向上が望まれる。また、染色は、現代的課題に対応した優れた教材である。

そこで本研究は、地域型アートプロジェクトの一環として、学童保育において、小学生を対象にした染色のワークショップの実践結果について報告することを目的とする。

2. 研究方法

(1) 取手アートプロジェクトについて

取手アートプロジェクト(TAP=Toride Art Project)は、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科が取手校地に設置された1999年より市民と取手市、東京藝術大学の三者が共同でおこなっている。前述のように、日本における地域

型アートプロジェクトの先駆けとなった取り組みである。芸術による文化都市を目指す取手のまちをフィールドとして、アーティストの活動支援と、市民の芸術体験・創造活動の仕組みづくりにより、芸術表現を通じた新しい価値観の創造を目指して活動している。

TAPは、2010年以降の複数年をかけて、郊外のまちとそこに暮らす人びとに向き合うプロジェクトを展開してきた。そのステップを経て、現在TAPは市内4カ所の活動拠点をベースとしながら、「あしたの郊外」を徹底するテーマとして活動している(表2)¹⁷⁾。

本実践は、TAPのベースプロジェクト「中間支援プログラム：取手で活動するアーティスト等の情報発信プログラム」の一環である、令和4年度芸術家パートナーシップ事業「放課後アートの時間」として行われた。TAP ホーム

ページには「本事業は、芸術家と放課後子どもクラブに居合わせる子どもたち、クラブの運営を支える人々が関係性を築き、個々の視点や専門性を活かしたプログラムを数日間にわたって実施する取手市からの委託事業です。コロナ禍中における芸術家および、子どもたちの活動支援を目的に、令和2年度よりスタートしました。」とある。令和4年度の当該事業は今回の実践を含めて8名(2人グループを含む)のアーティスト(大垣美穂子:美術・立体作品, 小津航:絵画(油彩), 表麻弥:染色テキスタイル, 鴻巣明史:ダンス・パフォーマンス, 長谷由香:箏演奏, 名取愛梨・郭瑞麟:絵画・工芸・インスタレーション・パフォーマンス, 星善之:演劇・パフォーマンス)が、14の学童保育においてワークショップを開催した。東京藝術大学の卒業生や大学院生も含まれており、主に若手の芸術家が起用されていた。造形に限らず、様々な表現活動が展開されていたことがわかる¹⁸⁾。

(2) ワークショップの概要

1) 実践の実施概要

当該ワークショップは、取手市内の小学校2校における学童保育、YクラブとTクラブで各8回にわたり実施された。活動期間は2022年8月から2023年2月、活動場所はクラブ室と校庭、活動時間は夏休みを除くと1時間45

分から2時間45分であった。同じテーマが1、2年生と3年生以上に分けて実施され、参加人数は各回9名から25名であった(表3)。

2) 実践者および支援者

実践者であり、共同研究者の表麻弥の表現ジャンルは「染色テキスタイル」、子ども、教育関連の活動歴は、「京都造形芸術大学大学院修了、取手市在住。市内外の保育園やイベント等で染色のワークショップを行っている。」とホームページで紹介された¹⁹⁾。

前述のホームページには「芸術家と放課後子どもクラブに居合わせる子どもたち、クラブの運営を支える人々が関係性を築き」とあった。実践は、実践者を中心に、サポートスタッフ、学童保育支援員の支援により、共同して行われた。実践者は各回事前に「プランシート」の作成を行って(後述)、「サポートスタッフ、支援員さんをお願いしたいこと」を明記し、事前に3者によるミーティングが行われ、活動が円滑に進むような準備をした。

3. 研究結果及び考察

(1) 教材開発

前述のように、実践者は毎回、活動案である「プランシート」を作成した。各々のテーマのプランシートを表に示した。活動の目標、各活

表3 ワークショップの実施概要

クラブ		活動日	活動場所	活動開始時刻	活動終了時刻	対象学年	人数
Y クラブ	1	2022/8/26	クラブ室	9:15:00 AM	12:15:00 PM	1, 2年生	20名
	2	2022/8/31	クラブ室	9:30:00 AM	12:00:00 PM	3年生以上	15名
	3	2022/9/27	校庭	2:15:00 PM	4:00:00 PM	1, 2年生	25名
	4	2022/9/28	校庭	2:15:00 PM	4:00:00 PM	3年生以上	25名
	5	2022/10/24	クラブ室	2:15:00 PM	4:00:00 PM	1, 2年生	25名
	6	2022/10/26	クラブ室	2:00:00 PM	4:00:00 PM	3年生以上	22名
	7	2022/12/14	クラブ室	1:30:00 PM	4:00:00 PM	1, 2年生	23名
	8	2022/12/15	クラブ室	1:30:00 PM	4:15:00 PM	3年生以上	17名
T クラブ	1	2022/11/21	クラブ室	2:00:00 PM	4:30:00 PM	3年生以上	10名
	2	2022/11/22	クラブ室	2:00:00 PM	4:30:00 PM	1, 2年生	15名
	3	2022/12/19	校庭	2:00:00 PM	4:30:00 PM	3年生以上	7名
	4	2022/12/22	クラブ室	2:00:00 PM	4:30:00 PM	1, 2年生	17名
	5	2023/1/23	クラブ室	2:00:00 PM	4:30:00 PM	1, 2年生	16名
	6	2023/1/24	クラブ室	2:00:00 PM	4:30:00 PM	3年生以上	16名
	7	2023/2/27	クラブ室	2:00:00 PM	4:30:00 PM	1, 2年生	24名
	8	2023/2/28	クラブ室	2:00:00 PM	4:30:00 PM	3年生以上	9名

動で子どもたち身に付けられる力（目標）、活動の内容、実施日、活動の流れ、サポートスタッフ、学童保育支援員にお願いしたいことが記されている。アーティスト、活動場所、対象者、細かい文面などは省略した（表4）。

染色の作業は工程が多いため、実践者は、全活動を通じ、限られた時間や施設設備の中で実践可能な範囲で内容を構成した。また、今回は、小学生が対象であったので、紙や布用のスタンプ、クレヨンなど取り入れやすいものを用いて、染色工程に含まれるデザインや、調色などに重点化したプランを提案した。児童の発想の転換や、新たな発見を促すために、廃材や生活用品など、より身近なものを使うこと、また、使えるものを制作することも意識し計画を立てた。

以下、各教材の概要を述べる。

1) カラフルはがき

染色をベースとした活動の導入として、染める過程において、自分で選んだ色と、それらが偶然混ざり合う色の組み合わせのどちらも見ることのできる折染めを選んだ。作業工程としても、折り紙感覚のできるので子どもでも取り入れやすいと考えた。残暑見舞いの時期であったことから、染めた紙を葉書に貼ってメッセージなどを書き、思い思いの人に送るというところまでプランとして提出した。

作業手順は、まず和紙を蛇腹におり小さく三角に畳んだら、6色用意してある色水の好きな色に浸していく。全部浸してしまうと、他の色が入らないので、少しずつ色を染み込ませていくのがポイントである。色を入れ終わったら、紙が破れないように和紙を開くと模様が現れる。それを乾かし、葉書に貼ってメッセージを書く。

和紙の折り方を変えたり、同じ折り方でも色の配置を変えるだけで模様が変わってくるので、各々様々な色柄が表現できる。

2) フロッタージュで模様を集めよう

普段、子どもたちが過ごしている身近なスペースにも模様になるものがあるという気づきと、着想を得ることをねらいとした。

クラブ室の床や、壁、校庭にあるタイヤ、木やマンホールなど凹凸があるものに紙をあてク

レヨンで擦る。凹凸によって色の濃淡で模様が現れる。集めた模様を切り取って画用紙に貼り付け再構成し、一枚の絵にする。同じ場所から採取した模様でも、再構成することで個々の表現が生まれる。

擦るだけで模様が出るので、絵を描くことに苦手意識がある児童でも、表現活動に入っていやすいのではないかと考えた。

3) 空の容器をスタンプにしてオリジナルバッグを作ろう

普段捨ててしまうような、プラスチックの空き容器や牛乳パックなどを使って、布バックにスタンプする活動を行った。ゴミと思っているようなものでも、見方を変えると新しい使い道があることや物を大切にすることに気づいてもらうことをねらいとした。染色の醍醐味でもある、日常に使えるものを作る経験をしてほしいと考えた。

まず、プラスチック容器の飲み口や側面に布用のインクを付ける。それを無地のバッグにスタンプして自由に模様を構成する。その後乾燥させ、アイロンで色を定着させる。

4) 身近なものから型をとってファッションショーをしよう

シール容器や文房具、クラブ室にあるおもちゃなど子どもたちの身近にあるものを使って模様を構成した。

幅の広いロール紙を用意し、体に合うように切る。紙を被って服に見立てるので、頭を出す部分をくり抜いておく。シール容器やハサミなどの輪郭に沿って紙にペンをあてて形を写し取り、模様にとする。出来上がった紙の服を身に纏って、友達や先生方に披露する。

5) 色当てクイズ 何色を混ぜたかな？

Tクラブでの1回目の活動であったことと、Yクラブでの経験も踏まえて、より根本的に「色で遊ぶ」ことから始めてみよう。

水彩絵の具の好きな色を選び、混色して色を作っていくことから始める。その後、あらかじめ混色して塗っておいたカードを渡し、何色を混ぜればカードの色に近づくか色を混ぜながらクイズを行う。カードの裏側には、何色を混ぜ

小学生を対象とした造形表現ワークショップの実践

表4 プランシート

カラフルはがきで残暑見舞いを送ろう	
児童が身につけられる力：自分で和紙を染める体験を通して、表現力を身につける。偶然性のある染めかたで染色を体験することで想像力を刺激する。季節感のある残暑見舞い送る経験を通して伝統的なコミュニケーションを学ぶ。	
内容：折染めで和紙を染め、はがきに貼りつける。	
実施日 2022年8月26日 2022年8月31日	
活動概要	サポートスタッフ、支援員さんをお願いしたいこと
9:30 集合	
9:30 準備	和紙3枚、はがき1枚、手袋1組、輪ゴム3つ1人1セット、1班に色水1セット用意する
10:00 自己紹介、活動内容説明。4人一組の班になる。	活動初めの挨拶（支援員さん）。アーティスト、サポートスタッフの紹介、班分けの際のフォロー
10:15 作業開始	セットしたものを配布する
10:45 乾燥作業	廊下などの広いところに新聞紙をを広げ乾燥させる。
11:00 はがきに張り付け	のり、はがみの配布。
11:15 はがきに書き込み	ペンの配布。
11:40 片付け	使った道具を洗う、貸し出したものの回収。
12:00 完全撤収	
用意する物：色水（染料）、和紙、はがき、新聞紙、輪ゴム、マスキングテープ	
安全面での留意点：染料を使うので、衣類についてしまつとれなくなる。はさみを使うので見守り	

空の容器をスタンプにしてオリジナルバッグを作ろう	
児童が身に付けられる力：空の容器を使いデザインすることで、創造性を養う。実際に使えるものを作る経験をする	
内容：牛乳パックや、ペットボトルキャップ、食品、生活証文品等の空の容器を利用する。容器をスタンプにしてオリジナルデザインのバッグを作る	
実施日 2022年10月24日 2022年10月26日 2023年1月23日 2023年1月24日	
活動概要	サポートスタッフ、支援員さんをお願いしたいこと
14:15 集合、準備	
14:45 自己紹介、活動内容紹介	活動初めの挨拶（支援員さん） アーティスト、サポートスタッフの紹介
14:50 製作開始	バッグ、インク、新聞紙、ペーパー、ウェットティッシュ、空の容器を配布する※色を変える際は、ペーパー、ウェットティッシュでインクをふき取るよう、指示をする
15:30 片付け	貸し出したものを回収
16:00 完全撤収	
用意する物：バッグ、インク、新聞紙、ペーパー、ウェットティッシュ、持ち帰り袋	

色当てクイズ 何色を混ぜたかな？	
児童が身に付けられる力：それぞれの色を混ぜると、どの様になるかを知る	
内容：用意したカードの色は難色を混合しているのか、実際に色を混ぜながら探していく。その後、各々が好きな色を混ぜて作り、その色で模様を描く	
実施日 2022年11月21日 2022年11月22日	
活動概要	サポートスタッフ、支援員さんをお願いしたいこと
14:00 集合、準備	
14:25 入室、自己紹介	活動初めの挨拶（支援員さん）
14:40 活動内容説明	アーティスト、サポートスタッフの紹介 1班5人に分かれる（1版に机2台）
15:00 制作開始（班ごと）	絵の具、筆、タオル、水入れ、紙皿、画用紙、コピー用紙（下書き用） 色のカード
15:30 色作り（各々）	1人1枚画用紙配布
16:00 片付け	貸し出したものの回収
16:30 完全撤収	
用意する物：絵の具、水入れ、筆、紙皿、画用紙、筆拭きタオル、新聞紙、コピー紙、マスキングテープ（掲示用）	
備考：班分けは当日行う	

フロッターージュで模様を集めよう	
児童が身に付けられる力：普段過ごしている校内をじっくり観察し理、身の回りにあるものから模様を採取することで、いつもの見え方と違う方向性から物事をとらえる力を養う。	
内容：学校内できになるところを見つけてフロッターージュし、模様を採取、集めた模様絵に絵を書き足したり、切り貼りして構成する。	
実施日 2022年9月27日 2022年9月28日 2022年12月19日 2022年12月22日	
活動概要	サポートスタッフ、支援員さんをお願いしたいこと
14:00 集合、準備	
14:25 入室 自己紹介	活動初めの挨拶（支援員さん）、アーティスト、サポートスタッフの紹介
14:40 活動内容説明	
15:00 制作開始	一人2枚紙、色鉛筆やペン、クレヨン等配布
15:00 模様採取	晴天：屋外に出てもよい、雨天：クラブ室、廊下 必要な児童には事前に用意した素材を配布する
15:25 構成作業	はさみ、のりの貸し出し
15:50 片付け	貸し出したものの回収
16:30 完全撤収	くっつき虫を使う
用意する物：紙、のり、クレヨン、色画用紙、色鉛筆、はさみ、マスキングテープ、くっつき虫	
安全面での留意点：危険な場所に行かないようにする。はさみを使うので見守り。	

身近なものから型をとってファッションショーをしよう	
児童が身に付けられる力：様々な用途で使っているものが、デザインの種になることを体験し、新しい視点で物事をとらえる力養う	
内容：プラスチック容器、文房具、おもちゃ等の型をロール紙に写し取ってデザインしたものを、着られる形にして、実際にきてみる	
実施日 2022年12月14日 2022年12月15日	
活動概要	サポートスタッフ、支援員さんをお願いしたいこと
13:30 集合	
14:00 自己紹介、活動内容紹介	活動初めの挨拶（支援員さん） アーティスト、サポートスタッフの紹介
14:10 作業開始	ロール紙、ペン等、花見の配布 紙の書きこむ前に首を出す穴を全員で開ける ※紙で手を切らないようにアナウンスする プラスチック容器を、順番に取りに来てもらう
15:10 ファッションショー開始	実際に作ったものを着て何度かどったかや、おすすめポイント等を紹介するなど
15:40 片付け開始	貸し出したものの回収
16:00 完全撤収	
用意する物：ロール紙、ペン、プラスチック容器	
安全面での留意点：はさみを使う、紙で手を切らないように見守る	

カラフルな色水で折染めをしよう	
児童が身に付けられる力：自分で和紙を染める経験、偶然性のある染色技法を体験することで想像力を刺激する	
内容：折染めで和紙を染める	
実施日 2023年2月27日 2023年2月28日	
活動概要	サポートスタッフ、支援員さんをお願いしたいこと
14:00 集合、準備	和紙5枚、手袋1組、輪ゴム1つが。一人分1セット。1版に色水1セット用意する。
14:25 自己紹介、活動内容説明	活動初めの挨拶（支援員さん） アーティスト、サポートスタッフの紹介
14:40 班になる	班分けのフォロー
14:50 作業開始	セットしたものを配布 ※配布の際和紙の端に名前を書くようにアナウンス 廊下などの広いところに新聞紙を広げ乾燥させる 湯気の悪そうなものはドライヤーで乾かす
16:00 片付け	使った道具を洗う 貸し出したものの回収
16:30 完全撤収	
用意する物：色水（染料）、和紙、ビニールテグ黒、新聞紙、輪ゴム、マスキングテープ、ドライヤー、養生テープ	
備考：染料を使うので、衣類についてしまつとれなくなる	

てあるかの答えが書いてある。2色混ぜたもの、3色混ぜたもの、それ以上と、難易度の違うカードを用意した。色を使うことに慣れてきたら、それぞれが好きな色を混色して作り画用紙に絵を描く。

6) カラフルな色水で折り染めをしよう

染める工程は、カラフルはがきと同様だが、染めた和紙を牛乳パックや空き箱に貼り付けてペンたてや小物入れを作った。

Yクラブでは初回の導入として行ったが、Tクラブでは、活動の締めとして最終回に行った。

どちらのクラブでも、折染めの手軽さと表現できる柄の幅広さが好評であった。

7) その他の計画

上記の6種以外にも、自然にある植物を採取して「たたき染め」をしてオリジナルバッグを作成する教材、紙を切って教室に飾り付けし、インストールする教材を計画していた。教材に関しては、実践者が事前に学童保育指導員と共有し、活動日時、参加人数、施設や備品等を検討してシミュレーションし、実現が容易で児童が取り組みやすい内容にした。

(2) 活動の様子

活用の様子、児童の作品の写真(表麻弥撮影)を、図1~4に示した。

1) Yクラブにおける活動

第1回：残暑見舞い作り(低学年)

低学年だったが、集中して楽しんでいる様子だった。長期休暇のため時間に比較的余裕があり、学童保育支援員のサポートもあったので、児童は、各自のペースで無理せず作業ができていた。追加の紙を使う児童も見られ、意欲的に取り組む様子が見られた。

第2回：残暑見舞い作り(3年生以上)

低学年の時と同様に、着色する行程を楽しみながら活動する様子が見られた。主体的に集中して活動できる児童が多く、指導の目が行き届いた。スポットを使って、丁寧に配色している児童が多かった。低学年の時よりも、様々な折り方をしていて、柄の出方もオリジナリティに富んでいた。前回と同様に様子を見て紙を追加で配布した。学童保育支援員も一緒に残暑見舞

いづくりに参加していた。

第3回：フロッタージュ(低学年)

今回も前回に続き、積極的に参加している様子だった。既にフロッタージュを知っている児童も何名かおり、指導が容易に進んだ。クラブ室から出る活動で心配な点もあったが、学童保育支援員、サポートスタッフのフォローがあり、無事終わった。児童は、屋外に出て活動することを楽しんでいる様子だった。

第4回：フロッタージュ(3年生以上)

児童は、低学年同様、積極的に参加していた。指導の意図をすぐに理解し、意欲的に模様を採取する様子が見られた。クレヨンを一度に何本も持ったり、寝かせて持ったり、実践者がアドバイスしなくても自発的に工夫している児童もいた。再構成の工程でも、自由にイメージして様々な作品が出来上がった。

第5回：オリジナルバッグ作り(低学年)

児童は、意欲的に楽しんで取り組んでいた。最初は取り組みをためらった児童も、最終的には集中して取り組んでいた。実践者の予想以上に各々の個性がある作品が多く見られた。

第6回：オリジナルバッグ作り(3年生以上)

低学年と比べると早めに作業を切り上げる児童が多かった。女子は比較的意欲的に作業をしていたが、高学年の男子の一部に、開始10分程で終える者がいた。また、「廃材の形を活用する」という今回の趣旨から外れる活動である、インクのパッドをそのままカバンにスタンプしたり、擦りつけて絵を描いている児童がいた。作業前に説明するなどの対応が必要と考えられた。

第7回：ファッションショー(低学年)

物の形から模様を取る段階から、大きな紙に自由に絵の描写を楽しむ児童も現れた。通常より活動時間が長かったので、集中を切らさないよう、サポートスタッフや学童保育支援員と相談して、時間配分を調節した。完成後、自身の作品を着て表現する場面では、初めは恥ずかしがっていた児童も、自身でデザインした紙を着て、自由に動き回る様子が見られた。校長先生や学校の先生方の参観により、児童がより一層、自身の作品に満足した様子だった。

第8回：ファッションショー（3年生以上）

3年生以上の児童は、低学年よりやりたい事を理解した上で作業していた。次々自由な発想が生まれ、ポケットを付ける児童や、紙の形自体を工夫している児童が現れた。完成後のファッションショーが恥ずかしい児童には、強制することはしなかった。出来た作品を実践者に見せ、制作の意図を説明する児童も見られた。

2) Tクラブにおける活動

第1回：色当てクイズ（3年生以上）

Tクラブは1回目だった。活動開始時は、消極的な児童がいた一方で、大変意欲的な児童もいた。他の児童が活動している様子を見て、途中から参加した児童が数名いた。

第2回：色当てクイズ（低学年）

Tクラブは参加に柔軟性があったので、気になる様子だが参加しない児童、後から参加児童もいた。初めは他の児童の活動が気になって、他の児童と同じ色を作っていたが、時間が経過し慣れてくると、自由に絵の具を混ぜて、個人的な色を作る様子が見られた。

第3回：フロッタージュ（3年生以上）

参加強制はしなかったので、参加した殆どの児童が積極的に取り組んでおり、実践者も指導しやすかった。作品を掲示する予定だったが、児童の意見に従い、掲示は行わなかった。少人数だったので、児童と実践者間のコミュニケーションを密にとることが出来た。

第4回：フロッタージュ（低学年）

フロッタージュの経験のある児童がおり、他の児童も経験者と共に、実践者の意図を汲んで、意欲的に取り組んでいた。同じ模様でも、様々な発想が生まれていた。模様をずっと集め続ける児童や、構成にこだわる児童など、取り組みに個性が見られた。よりよい表現を考えながら取り組むことが出来る児童が多く見られた。

第5回：オリジナルバッグ作り（低学年）

初めはうまく模様が見つからずためらう児童もいたが、慣れてくると色や容器を変えて意欲的に作業する様子が見られた。スタンプの模様とペンを使った絵を組み合わせてデザインする児童など、各々工夫して取り組んでいた。

第6回：オリジナルバッグ作り（3年生以上）

すぐにコツを掴んで、デザインする様子が見られた。意欲的に取り組み、実践者が提案した以外の方法にも挑戦し、個性的な作品が生まれていた。児童自身が様々な提案をした点は、活動の成果と考えられる。

第7回：折染め（低学年）

活動内容を説明する際、これまでの活動の中で児童の意欲が最も高まったと感じられた。白い紙に色が着くのを楽しむ様子が見られた。途中、折らずに着色している児童もいたが、あえて指導はせずに見守った。

第8回：折染め（3年生以上）

人数が少なく、落ち着いて作業出来た。折染めをした後に、染めた紙を牛乳パックに貼り付けて小物入れを作ったり、ノートの表紙に貼って活用する時間を十分にトルことが出来た。色水遊びを始める児童もいたが、軌道修正することが出来た。3年生以上は、染めるだけでは作業に飽きてしまう様子が見られ、そこからの展開を準備しておいたことで、良い結果につながったと考えられる。



図1 フロッタージュ



図2 折染め



図3 オリジナルバッグ



図4 ファッションショー

(3) アンケート結果

TAPがTクラブの学童保育支援員2名と参加した児童20名を対象としたアンケートを実施した。結果は以下のとおりである。

1) 学童保育支援員へのアンケート結果

支援員はいずれも「満足」、同じような機会があってよいと回答し、良かった点について、材料が十分に用意されていたこと、普段出来ない体験であったことを挙げていた。「(実践者は)十分に準備したので、(子どもたちは)こころのままに創作することが出来た。」また、「子どもの興味、やる気を引き出そうと、いたるところに工夫していた。」との感想だった。

2) 参加児童へのアンケート結果

参加児童の回答は、1年生(4名)2年生(11名)3年生(4名)4年生(1名)計20名であった。楽しかった18名、普通1名、つまらない1名、またやってみたい18名、やりたくない1名、無記入1名であった。

感想の自由記述は以下の通りであった。

- ・楽しくないとおもったら楽しかったです。おもてまやせんせいまたいつかきてください(1年生)
- ・いろんな色ができて楽しかった(1年生)
楽しかった(1年生)
- ・また絵の具をやりたい(2年生)
- ・いろいろアートのことをおしえてくれてありがとうございます。(2年生)
- ・こんどいっぱいやりたい(2年生)
- ・楽しかったしまたやってみたいと思いました(2年生)
- ・バッグがなんか楽しかった(2年生)
- ・また来てください(2年生)
- ・次は遊びがしたいです(2年生)
- ・「自由にしてね」と言われたときが一番でした(3年生)
- ・アートの時間楽しかったです。またいつかできるかもしれません、ありがとうございます。(3年生)
- ・いろいろないろで、がらをつくるのが楽しかった(3年生)

(4) 児童への教育効果

各学童保育では、自主参加ではあったが、各々4種の教材について4回とも参加する児童が多く見られた。今回の実践のほとんどが平日の放課後に行われた。児童は、帰室、宿題、遊び(運動を含む)、補食などの単調な生活の中で、先生や学童保育指導員ではなく、若手芸術家が指導する、今まで体験したことのない「染色」活動を、様々な形で行った。児童の放課後の生活に彩りを与えたことは、間違いないだろう。

児童の取り組みによる作品は短い時間にもかかわらず、大変完成度の高いものであった。また、一部の活動を除き、低学年、3年生以上に関わらず、小学校の授業時間よりも長い2時間ほどの時間を集中して活動できていた。さらに、すべての活動において強制はせず、児童の自主性、主体性を重視したが、多くの児童が意欲的に取り組み、追加の教材を使って制作する児童も見られた。実践者が指導しなくても、自身で工夫したり、実践者が予想しない作品を制作する児童もいた。児童が考えて表現すること、思考力・表現力が少なからず高まったことが推察できる。

今回は個人単位の制作であったが、互いに意識しあって活動し、互いの作品を評価する様子が多くみられた。コミュニケーション力の育成にも良い影響があったと考えられる。

今後も継続して実施されることにより、子どもたちの思考力、表現力だけでなく、アートへの関心の高まりが期待される。また、活動の広がりにより、我が国の芸術文化の底上げにもつながるだろう。今回は取手市が支援するプロジェクトの一環として実施されたが、このような取り組みが全国の学童保育に広がることが望まれる。

4. まとめと今後の課題

本研究では、地域型アートプロジェクトの一環として、学童保育における、小学生を対象に「染色」のワークショップを実践した結果について報告した。以下にその概要を示す。

1) ワークショップは、2022年8月から2023

年2月に、取手市内の小学校2校における学童保育で各8回、計16回にわたり行なわれ、各活動の参加人数は9名から25名であった。長期休暇の活動を除く活動時間は、約2時間であった。

2) 限られた時間や施設設備の中で実践可能であり、紙や布用のスタンプ、クレヨンなど、小学生が取り入れやすいものを用いて、染色工程に含まれるデザインや、調色などに焦点化したプランを提案し、学童保育指導員と検討して教材を決定した。

3) 6種の教材(①色染めした紙を用いた残暑見舞い作り、②フロッタージュした紙を再構成した作品作り、③染料を廃材などを用いてスタンプしたバッグ作り、④大きな紙を服に見立てて模様をデザインしてファッションショーをする、⑤水彩絵の具を混色してカードの色に近づける、⑥和紙を使った折染め)を採用した

4) 作品の完成度は高かった。自主性、主体性を重んじ、強制はしなかったにもかかわらず、意欲的な取り組みがみられた。また、児童の工夫により、実践者が予想もしない作品を制作する児童も複数みられ、4回の活動により、思考力・表現力の高まりが観察できた。

同じ教材の複数の実践では、前実践をフィードバックして指導を工夫したが、今回の実践結果を受けて、今後はさらに教材の教育的効果を高める工夫を行いたい。また、今後、教育的効果をより客観的に測ることができる方法を用いて評価を行いたい。

文献

- 1) 文部科学省(2019)『小学校学習指導要領』
- 2) ベネッセ教育研究所(2016)『VIEW教育委員会版2016 vol.2』
- 3) 前掲文献1)
- 4) 前掲文献1)
- 5) 松尾美咲, 山本政幸(2022)「小学生を対象としたオンラインでの造形ワークショップの実践」『美術教育学研究』54, 321-328
- 6) 村上佑介(2020)「児童を対象とした立体造形ワークショップの実践」『美術教育学研究』52, 337-344

- 7) 小室明久, 笠原広一 (2019) 「美術教育におけるモダンテクニックの特性—小学生を対象にしたワークショップの実践から子どもの表現の展開に着目して—」『初等教育カリキュラム研究』7, 135-145
- 8) 片岡杏子 (2006) 「地域コミュニティ施設における造形教育の現状と課題—児童館の造形遊びワークショップを通して—」『美術科教育学会誌』27, 135-146
- 9) 厚労省 HP 「放課後児童健全育成事業について」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/kosodate/houkago/houkago.html
(2023年10月15日閲覧)
- 10) 京都国立近代美術館 HP 「世界の染織」
<https://www.momak.go.jp/Japanese/exhibitionArchive/1965/21.html>
(2023年10月15日閲覧)
- 11) 経済産業省 HP 「伝統工芸品」
https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/nichiyo-densan/index.html
(2023年10月15日閲覧)
- 12) 藍 HP 「伝統的な藍染」
<http://japanblue-ai.jp/about/tradition.html> (2023年10月15日閲覧)
- 13) 日本の藍の里めぐり HP
<http://japanblue-ai.jp/enjoy/culture.html>
(2023年10月15日閲覧)
- 14) 前掲文献1)
- 15) 稲田文 (2023) 「伝統文化を継承する視点を育む教材の提案—手ぬぐいの染色体験をとおして—」『活水論文集』66, 91-98
- 16) 吉澤弥生 (2019) 「アートはなぜ地域にむかうのか—「社会化する芸術」の現場から—」『フォーラム現代社会学』18, 122-137
- 17) 取手アートプロジェクト HP
<https://toride-ap.gr.jp/>
(2023年10月15日閲覧)
- 18) 取手アートプロジェクト HP 「ベースプログラム—中間支援プログラム 取手市内の放課後子どもクラブで活動する芸術家を紹介します」
<https://toride-ap.gr.jp/baseprogram/intermediary/?p=10444>
(2023年10月15日閲覧)
- 19) 前掲 HP18)

謝辞

本研究の遂行にあたり、取手アートプロジェクトに多大なご協力を頂きました。ここに深く感謝致します。